

《研究ノート》

伊藤整の小説論をめぐる

——文学の機能に関する覚え書き——

斎藤 忠利

かつて芭蕉は俳諧の道を「夏炉冬扇」にたとえたが、仮にこれを額面通りに受けとれば俳諧の道は、芭蕉において、無用の芸として認識されていたことになる。しかしながら、この認識には、芸術に次元の低い実用性を求める要求をきびしく拒否する芸術家の強い矜持と烈しい気魄がこめられていた。

ところで、今日もお、我々の周囲には、科学の名において目先のきかない実利主義が横行し、たとえば、人間をその全体性において考える芸術としての文学の無用性を説き、また、その無用性を恥じる声が、時として聞かれることはないであろうか。その昔、文学が、たとえば、叙事詩として伝承された時代には、詩としての文学は、いわば呪文的な力をもって人間の精神を支配していたかに見える。そして、そのような文学が自らを恥じなければならぬと感ずるようになったらしいのは、文学作品が個人の作家の密室で書かれ、これを個々の読者が密

室で読むようになった、近代小説の成立期以後のことのように思われる。このように、その中心を詩から小説へと移すにつれて、自らを恥じなければならぬと感ずるようになったらしい文学の機能は、いったい、どのようなものなのであろうか。以下の小論は、伊藤整氏の著書『小説の方法』（一九四八年）、『小説の認識』（一九五五年）、『芸術は何のためにあるか』（一九五七年）を手掛かりとして、文学——と言っても、もっぱら近代小説——の機能について考えるための若干のノートである。

（なお、最近、佐伯彰一氏は、その論文「近代日本と小説」〔『文学界』昭和四十一年十月号〕において、伊藤氏の著書を取りあげ、『小説の方法』において、氏は一見、近代小説一般の「方法」をあとづけ、分類しようと試みているかに見えるが、読みすすむにつれて、氏の真意は、日本の近代小説、とくに私小説の「方法」の把握、闡明に存したことが判る」と書き、伊藤氏のねらいが『日本の私小説に「方法的」な裏づけをあたえようとする所にあった』ことを見抜いている。小論の目的は、佐伯氏の尻馬に乗って、伊藤氏の著書の真意をあばきたることではなく、あくまでも、これらの著書から、文学の機能に対する考察のためのヒントを得ようとするにある。〕

さて、伊藤氏にとって、近代小説の表現方法の基本は「内なる声による発想」である。ところで、「内なる声」とは、本来秩序なしには生きられない生命の、秩序に対する抵抗の声であって、従って「芸術とは、生命をその働きという実質でとらえるために人間が作り出した認識の手段である」ということにな

る。(因みに、ここから導き出される結論は、小説はすべて作家の告白の手記であるということであり、そのことが、日本特有の現象とされる私小説も、「小説にとって作者の私がどうあるかの問題」が広く「文学そのものの根本的な問題」であるという意味において、いわゆる本格小説と質的に異なるものではないことを証明することになる。)そして、このような小説の認識を確立する手段として、伊藤氏は、アルベール・ティボーデの『小説の美学』の中の一章「小説の読者」の所説を援用し、これを、「文字と書物とを持たぬ公衆の前で朗誦された叙事詩、物語りが、印刷されて室の中で読まれるようになった時に小説が成立したと言っている」と理解して、次のように書く

「……それはつまり小説という芸術では演者と鑑賞者が顔を合わせないということである。顔を合わせない。そして演者即ち作者は密室で一人でそれを作り演じ、読者は密室で一人でそれを味う。その条件において初めて、他人に言うのをはばかるような内密のもの、罪深いもの、煽情的なもの、告白などがはけ口を見出して書かれるようになり、また読む方も、他人の秘密なひとりとごとを聞き、他人の隠したがる行為や考えを知るといふ戦慄を味うようになった。面と向っては話すことも聞くことも工合悪く、他人と一緒にいてはその存在を認め合うことはばかられる色々なことが、そこで明るみになる。それは時としては神に訴える罪ある人間の切ない声であり、また時としては、情慾的な好奇心を満足させる打ちあけ話でもある。」

そして、そこに近代の小説が成立した、と伊藤氏は考えるのであるが、その時、人間は、近代小説において、「全く新しい発想法」、「新しい表白の道」を得たことになり、おのれのエゴのなまの声を生命そのものの声として表白することができるようになった。しかし、「個我の声が切実なものであり、自己にあまりにも即したものであるとき、それは一人の密室で読まれるにしても社会に公表されるのであるから、羞と不都合とから作者を守るために仮想を、虚構を必要とする。小説における虚構は、この必要から生まれるので、告白と懺悔が真実であり、真剣であれば、それは必然にそれだけ多くの虚構のなかに自己を隠す」ことになる。

以上のような立論に、性の働きが、生命そのものの表現でありながら、自らを恥じ、自らを隠さなければならないというような事情にも似た、近代小説の本質とその性格に対する、鋭い洞察力がうかがわれることは何人も疑わないであろう。しかしながら、佐伯氏も指摘しているように、小説における虚構を作家の自己防衛の手段としてのみ理解しようとするのは、「余りに消極的、余りに繊細すぎる」、きわめて日本的な虚構観であって、スケールの大きいヨーロッパ小説やアメリカ小説の大仕掛けな虚構を説明しきれないことも事実である。

そこで、むしろ、小説における虚構というものを、人間存在における演技性の問題——演技が人間に対してもっている絶大の魅力という観点から、積極的な人間精神の活動として捉えるのがよいように、私には思われる。

そもそも、人間は、社会的、歴史的な存在として、すべて、一回限りの、しかも絶対に取り返しのきかない生を生きている。その事実を痛いほど自覚すればするほど、人間は、ついに叶わぬ願望として、生の繰り返しを、生まれ変わりを、他者になることを切望してきた。つまり、不可能であるからこそ、不可能なことを、それだけ強く望むのである。ここに、演技——他者になる真似事——が、人間に対してもつ絶大の魅力の秘密がある。従って、演技は、人間存在における原初的な、本質的なと言つてよい願望の充足形式として、人間存在のあり様を決定してきた。誤解を恐れずに敢えて極言すれば、人間の行動は、すべて、演技である。そして、たとえば、人間の最も古い行動の一つである宗教行事も、演技の一形態として始まっていると言つてよく、旧約聖書の時代のユダヤ人は、自らの罪をアザゼルの山羊に背負わせ、これを身代りとして荒野に追放することによって、わが身の救いを得たのであり、ユダヤ教を母胎とするキリスト教は、神の独り子が、人間の身代りとして、人間の罪のために死ぬという教義の形で、いわば、演技を神格化することに成功した。しかし、この演技の主役は、あくまで神の子とされるキリストであり、人間は脇役であつて、それに飽き足らぬ人間が演技の主役とならうとした時、そこに演劇が生まれたと推定される。いわゆる宗教劇から演劇が生まれたのは、恐らく、このような経路を辿つたのであらう。もちろん、その一方では、オリンポスの神々にも人間の属性を与える、正に人間中心の世界観の中で人間が演技の主役となつたとこ

ろに、古代ギリシャの演劇が発生したと見ることもできるであらうが、これら二つの演劇の二大潮流は、ともに他者にならうとする人間の願望を充足する手段としての演技の魅力を、人々に教え続けたに相違ない。しかしながら、演技は、あくまで真似事であり、真似事を本物と見るのは、一つの約束事としての不可能であることから、演劇としての演技は、時間的、空間的に約束事の上のみ成立するのであつて、こうして演劇は舞台——約束事の具体化——の上で演ぜられるものとなつた。そして、その時、約束事は舞台として具体化されなければならないことから、舞台における演技の幅は、必然的に制約されざるを得ず、ここに演劇における演技の限界が見えてくるようになる。

これに反して、言葉だけを用いて作る文学の世界においては、演劇における舞台にあたるものが、人間の現実世界全体であるだけに、他者にならうとする人間の願望は、叙事詩が公衆の面前で朗誦されていた時代にも、ひそかに自らを叙事詩の主人公に仮託すること——広義の演技——によって、かなり大幅に充足されていたと考えられる。やがて印刷術の発達によって、文学作品が作家の密室で書かれ、これが読者によつて、これもまた、密室で読まれるようになって、そこに近代小説が成立した時代になると、人間の演技力は、小説における虚構という形をとつて、最大限に発揮され得るようになり、そこに作家は言い知れぬ満足を感じ、読者もその満足を分かち合うようになつた。そして、その満足があまりにも大きかつたために、

かえってそこに一種の後ろめたさを感じざるを得なかった。ヨーロッパの近代小説における虚構のかけに、なにか作者の罪意識の影のようなものを感じるとすれば、それは、キリスト教化の中に育った作家の倫理感が、演技としての虚構の与える喜びのあまりにも大きいことに、とまどっているためではなからうか。フローベールがボヴァリー夫人を殺したのは、小説における虚構の与える満足感が大きすぎて、それに罪意識をさえええた作者の倫理感が、その満足感を断とうとしたためではなかったらうか。このような倫理感を欠いた、伊藤整氏のいわゆる「逃亡奴隷」——我が国の私小説家たちは、その実生活そのものを演技にかえ、その演技を書き写して、虚構をさええ不用とす

る小説を生みつつ演技の与える痺れるような喜びの中に身を滅していった。このことは、なによりも、人間存在における演技の底知れぬ魅力を物語るものであり、人間存在の本質的なあり方としての演技性を明らかにする。文学は、言葉による芸術として、言葉のもつ功利性のために、他のいかなる芸術よりも深く、言葉が伝達の手段として用いられる実人生に、かかわりをもつという点で、さまざまな機能をもつことが予想されるけれども、以上の考察によって明らかのように、何よりもまず、人間の本質的な欲求を充足し、演技の可能性を最大限に拡大する機能をはたすものとして規定することができるであらう。

(一橋大学助教授)